

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

An aspect in the formation of Rong-yu-tang Shui-hu-zhuan Tkilff#

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 晴彦, Sato, Haruhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1635

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



容與堂本『水滸傳』成立の一側面

佐 藤 晴 彦

は じ め に

筆者は先に、元から明にかけて表記法に変化があった四つの文字、“哩”“慌”“教”“原來”の表記を根拠にして、脈望館雜劇に収められた四種の版本——古名家本、息機子本、内府本、于小穀本——の検討を行った⁽¹⁾。その結果、

于小穀本 > 古名家本 > 内府本 > 息機子本
の順で古い表記法を残しているという結論に達した。ただそれは飽くまで「古い表記法を残している順」というだけで、この順がそのままそれぞれの版本成立の順というわけではない。このうち内府本が最後まで手を加えられたことを考えると、手が加えられた結果、思想面で大きな変化があったと同時に、文字表記も多くの変化をとげたことと思われる。その点を考慮に入れるなら、四つの版本成立の順は、恐らく

于小穀本 > 内府本 > 古名家本 > 息機子本
ということになるろう。

小論では同様の方法によって、容與堂本『水滸傳』の成立という問題に焦点をあて検討することを目的とする。

「同様の方法」といっても全く同じ文字の表記法を問題とするわけではない。同じ文字の表記法を扱っても効果がないのは明白だからである。それは前稿でとりあげた四つの文字表記の内、容與堂本で有効に働くのは“哩”だ

けであり、他の三つは有効には働かないからである。何故か？“慌”“教”“原來”の三つは、容與堂本ではその表記法が非常に安定しており、極く一部の例外を除いて表記法に統一がとれているからである。それは容與堂本が萬曆年間に出版された時、あるいはそれより少し早い段階で、この三つ文字の表記法についてはかなりの統一がはかられたためと思われる。従って、“慌”“教”“原來”の三つを根拠として、新しい表記法に改められたとか、古い表記法を留めているとかいう判断ができないのである。では『水滸傳』の場合、どの文字を問題にすれば効果的なのであろうか。それは方位詞の“裡”と語気詞の“哩”である、と筆者は考えている。

ところでこうした調査をする際にどうしてもおろそかにできない問題がある。それはテキストの問題である。筆者はこれまでに何回となく使用するテキストの重要性を説いてきたが、言語の歴史的研究にとって、その基づくテキストの重要性はいくら強調しても強調しすぎということはない。とりわけ今回のような文字表記を問題にするのであれば、正にテキストが命なのである。しかも文字によっては、各版本で用字法のシステムが異なるから、容與堂本なら容與堂本、袁無涯本なら袁無涯本それぞれ別個の検討が必要なのであって、排印本に基づいて調査するというのは、もはや問題外である。

使用するテキスト

周知の如く容與堂本『水滸傳』の内、われわれが比較的容易に見れるのに三種ある。北京本、天理本と内閣文庫本である。これまでの研究では、この内内閣本が最も改訂が多くなされていて一番新しいが、北京本と天理本の前後関係はかなり複雑で、一概にどちらが新しく、どちらが古いかということ(2)はそう簡単には決定できない、と言われている。北京本、天理本は甲乙つけがたいが、小論では北京本に影印本があり、その点で天理本より容易に見ることができ利用しやすく、今後の研究も北京本が中心になるであろうことを考慮に入れ、今回の調査も北京本を中心とし、必要に応じて他の版本にも言

及することにする。

問題の所在

いま、容與堂本『水滸傳』の方位詞、語氣詞の“li”の使用情況と各回末にある締めくくりの表現を一覧表にしたのが表1である(p.4)。調査した回数は引首、1回～40回、45回、73回、77回、86回、90回の計46回分。41回以降で回を選択した基準は、語氣詞“li”が使われているという点である。

表1から、おおよそ次のようなことが言えるだろう。

1. 方位詞の＜裏＞と＜裡1＞（「ネ+里」という文字であるが、現行の活字にないため“裡”で代用し、＜裡1＞と呼ぶことにする）は、各回で使われている数はもちろん違うが、ほぼ万遍なく使われている。
2. それに対し＜裡2＞（「ネ+里」という文字で、現行の“裡”のことであるが、先の＜裡1＞と区別するため、＜裡2＞と呼ぶことにする）の使われ方には特徴が認められ、限られた回数に集中して使われている。とりわけ24回の101箇所というのは異常なほど使用頻度が高い。
3. ＜裏面＞＜裡1面＞＜裡2面＞は、一応他の“～裡”と分けて示したが、とりたてて論じるほどの問題はない。ただ『水滸傳』では＜裏面＞＜裡面＞のように＜～面＞が使われることが圧倒的に多く、＜裏頭＞＜裏邊＞のように＜～頭＞＜～邊＞の用例が極めて少ない、ということ注目される現象である。
4. 語氣詞の“li”は、その使用自身があまり多くないため、方位詞ほど明確な対立は示していない。ここでは＜里＞＜裡＞が使われている回数そのものが重要である。

以下、それぞれの点について検討を加えていくことにする。

表1 容與堂本『水滸傳』（北京本）における“li”

語集 回数	(1) 方位詞 ～裏	(2) 方位詞 ～裡1	(3) 方位詞 ～裡2	(4) 方位詞 裏面	(5) 方位詞 裡1面	(6) 方位詞 裡2面	(7) 語氣詞 里	(8) 語氣詞 裡	(9) 語氣詞 哩	(10) 煞尾
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	不因…
1	5	9	0	0	2	0	0	0	0	那真人…
2	6	45	0	0	5	0	0	2	(内閣1)	不是…
3	2	23	0	0	4	0	0	2	(内閣2)	不是…
4	2	43	0	1	4	0	0	3	(内閣3)	真長老…
5	2	4	20	2	1	2	0	1	(内閣1)	不是…
6	2	7	17	1	2	3	0	0	0	只教…
7	7	25	2	1	1	0	0	0	1	不因…
8	5	23	0	0	1	0	0	0	0	
9	1	29	0	0	3	0	0	0	0	有分教…
10	5	40	0	3	6	0	0	0	0	不是…
11	8	11	0	3	1	0	0	0	0	不是…
12	1	14	0	0	1	0	0	0	0	不因…
13	1	14	0	0	1	0	0	0	0	不是…
14	0	34	0	0	5	0	0	0	0	吳用…
15	3	20	0	0	2	0	0	0	0	正是…
16	6	36	0	0	2	0	0	0	0	正是…
17	4	35	0	1	1	0	1	0	(内閣1)	何清…
18	5	35	0	0	2	0	0	1	(内閣1)	不是…
19	2	48	0	0	3	0	0	0	0	林冲…
20	0	33	0	0	0	0	0	0	0	不是…
21	15	43	19	0	2	0	0	0	5	古人云…
22	6	14	12	1	0	1	0	0	1	柴進…
23	1	2	25	0	0	3	0	0	2	不是…
24	20	11	101	0	1	4	1	0	(内閣1)	不是…
25	5	4	33	2	0	1	1	0	(内閣1)	正是…
26	3	52	0	0	2	0	0	0	0	武松…
27	3	19	0	0	6	0	0	0	0	張青…
28	6	7	22	5	0	0	(天理1)	0	1	那施恩…
29	7	1	20	3	0	3	0	0	0	武松…
30	19	11	31	2	0	1	0	0	0	不是…
31	26	48	0	5	1	0	2	0	(内閣2)	正是…
32	3	49	0	0	1	0	0	0	0	宋公明…
33	3	33	0	0	3	0	0	0	2	不是…
34	2	23	0	0	0	0	0	0	0	正是…
35	1	27	0	1	5	0	0	0	0	不因…
36	14	23	0	1	2	0	1	0	0	不因…
37	4	50	0	0	6	0	0	0	1	不是…
38	5	45	0	0	5	0	0	0	0	正是…
39	17	56	0	2	2	0	0	0	0	吳學究…
40	10	21	0	1	0	0	0	0	0	有分教…
45	5	50	0	0	8	0	1	0	0	正是…
73	10	1	7	5	0	0	1	0	0	只見…
77	5	14	0	1	1	0	1	0	0	不是…
86	2	5	0	3	3	0	0	1	0	不是…
90	2	7	0	0	1	0	1	0	0	不是…

〔備考〕 裡1：ㄋ＋里
 裡2：ㄋ＋里
 煞尾：章回小説の末尾の言葉
 内閣：内閣文庫蔵容與堂本『水滸傳』
 天理：天理図書館蔵容與堂本『水滸傳』

1. 方位詞 “li”

1. 1 <裡1>について

方位詞 “li” について、香坂順一1987では次のように述べられている。

「“這裏”“那裏”の“裏”は“里”“裡”とも表記されている。唐・五代・北宋では“裏”，南宋・金元では“里”を併用している。“裡”は元末明初から用いられ始めたが，これら三つの文字は，現代語で“里”に人為的に統一されるまでに区別なく用いられていた。⁽³⁾」

ここでは“這裏”“那裏”の“裏”が問題とされているが，方位詞の“li”の表記法にもほぼあてはまる。方位詞“li”の表記法の変遷は，だいたい香坂氏の指摘するようであるが，これら三つの文字が「区別なく用いられていた」という点，「裡」（小論でいう<裡2>）は元末明初から用いられ始めた」という<裡2>の出現という点に関しては，もう少し肌理の細かい議論が必要である。とりわけ後者については，前稿で指摘したように，<裡2>が普及する前に<裡1>の段階があったのは間違いないことであり，明代に入っていくなり<裡2>が使われたわけではない。『水滸傳』の場合でも表1に示したように，<裡1>が万遍なく使われており，明代ではむしろ<裡1>の方が優勢であった，と思われるくらいである。そのことを確かめるため，試みに『金瓶梅詞話』の1回から10回まで，方位詞“li”の使われ方（<這li><那li>の“li”も含める。以下の調査も同じ）を一覧表にしてみると，次のようになり，<裡1><裡2>では<裡1>が圧倒的に多い。⁽⁴⁾

表2 『金瓶梅詞話』の方位詞“li”（1～10回）

	裏	里	裡1	裡2	哩
金瓶梅	22	126	203	1	2

明代の資料として代表的な『水滸傳』『金瓶梅詞話』がこのような使われ方であるところから判断して、明代では<裡1>が優勢であったと思われる。否、明代はおろか、清代でも<裡1>が根強く使われていたフシすらある。⁽⁵⁾では<裡2>は何時頃から使われ出したのであろうか。次にその問題を考えてみることにする。

1. 2 <裡2>について

<裡2>が何時から使われ出したかという問題を解決するため、現行の辞典類をざっと調査したところ、この表記に注意をはらったものは案外少ないことがわかった。筆者の気がついたのでは、わずかに『漢語大字典』が<裡2>の古い用例として、『類説』の次の例を挙げているにとどまる。

鸛鵲樓頭日暖，蓬萊殿裡花香。

『類説』卷15

『類説』の古い版本としては現在明本が知られている。そこで当該箇所を明本で確認すると、「示+里」という字となっており、まさに「示す偏」に作っているのである。⁽⁶⁾従って『類説』は<裡2>の例にはならない。

そこでいずれも刊記があり、成立年代がはっきりしている主として明初、中期の資料をいくつか調査することにした。これらにおける方位詞“li”の使用状況を表にしてみると、次のようになる。⁽⁷⁾

表3 明初、中期の方位詞“li”

	裏	里	裡1	裡2
大誥武臣（洪武21年 [1388年]）	40	0	0	0
辰鈞月（永樂2年 [1404年]？）	12	10	0	0
義勇辭金（永樂14年 [1416年]）	10	8	0	0
降獅子（　　　　　？）	5	5	0	0
八億慶寿（宣德7年 [1432年]）	14	2	0	0
常椿寿（宣德8年 [1433年]）	5	13	0	0
十長生（宣德9年 [1434年]）	4	1	0	0
神仙會（宣德10年 [1435年]）	6	3	0	0
嬌紅記（　　　　　）	55	174	0	0
開宗義（成化13年 [1477年]）	12	2	0	0
西廂記（弘治11年 [1498年]）	11	157	0	0
琵琶記（嘉靖27年 [1548年]）	49	148	57	1(1)
十段錦（嘉靖37年 [1558年]）	212	8	8	4

洪武から弘治にかけては<裡1><裡2>が全く使われていない。しかし、これらの調査を終えた後、成化本『朱子語類』にすでに<裡1><裡2>が使われていることに気がついた。全面的な調査をしていないため、この表には載せられなかったが、塩見邦彦1985によって確認すると、少なくとも<裡1>2個、<裡2>4個が使われている。しかもこの6個がすべて巻34に集中している。残念ながらその理由が何であるかはわからない。成化本『朱子語類』の序文は成化9年(1473年)であるから、この表では初出となっている『琵琶記』より75年前ということになる。従って問題の<裡2>は、15世紀の後半には<裡1>とともに使われていたらしい。

上に述べたように、<裡1><裡2>はほぼ同時に使われるようになったらしい。ところがどうしたことか、<裡2>はすぐには普及しなかったらしく、もっぱら<裡1>が使われていた。<裡2>が比較的使われるようになるのは、どうも萬暦の頃かららしい。それとて「定着」という点から見れば、ほど遠いものがある。

1. 3 <裡1>の下限、<裡2>の定着

それでは<裡1>は何時頃まで使われたのであろうか、また<裡2>が使われ出したのは嘉靖年間だとしても、それが“li”の表記法として定着するのは何時頃からなのであろうか。この疑問に対しては、『紅樓夢』がヒントを与えてくれる。『紅樓夢』の庚辰本と程甲本の、それぞれ1～10回までの方位詞“li”の表記法を調査すると、次のような結果となった。

表4 『紅樓夢』における方位詞“li”

	裏	里	裡1	裡2
庚辰本	1	222	32	0
程甲本	2	7	4	236

両者の違いは明白である。庚辰本の作者が主として使用するのは<里>であり、まるで<裡2>という表記法を知らないかの如くである。それとは全

く逆に程甲本はほとんどが<裡2>を使用している。両者が見事なまでの差を示していること自体興味ある現象だといえるが、小論の主旨からずれるので、その問題にはこれ以上は立ち入らない。ここでは<裡1>の勢力が衰え、<裡2>が定着し始めたのは、どうやら乾隆期頃であつたらしいということがわかっただけで十分である。⁽⁸⁾

以上のことから、方位詞“li”の表記法の変遷はほぼ次のようにまとめられる。

裏：宋，元によく使われる

里：元代，明初によく使われる

裡1：成化頃から使われ，明代から清の乾隆期頃まで使われたらしい

裡2：成化頃には使われだし，萬曆頃から普及，清の乾隆期頃から定着したらしい⁽⁹⁾

つまり方位詞“li”の中心となる表記法は，

裏 → 里 → 裡1 → 裡2

と変化したのであり，<裡2>は最も遅く普及し始めた表記である。

1. 4 『水滸傳』における<裡2>の意味

これまで見てきたように，<裡2>は方位詞“li”のうちで最も遅く普及した表記法である。とすると，『水滸傳』で<裏><里><裡1>が万遍なく使われているのに，なぜ<裡2>が極く限られた回にしか表われないのがある程度推定できるようになる。つまり<裡2>が使われている回は，最後まで手が加えられた結果ではないか，ということである。そこで<裡2>が使われている回とその題目を，もう一度整理してみると，

5 回 小霸王醉入銷金帳 花和尚大鬧桃花村

6 回 九紋龍剪逕赤松林 魯智深火燒瓦礫寺

7回	花和尚倒拔垂楊柳	豹子頭誤入白虎堂
21回	虔婆醉打唐牛兒	宋江怒殺閻婆惜
22回	閻婆大鬧鄆城縣	朱仝義釋宋公明
23回	橫海郡柴進留賓	景陽岡武松打虎
24回	王婆貪賄說風情	鄆哥不忿鬧茶肆
25回	王婆計撮西門慶	淫婦藥鴆武大郎
28回	武松威鎮安平寨	施恩義奪快活林
29回	施恩重霸孟州道	武松醉打蔣門神
30回	施恩三入死囚牢	武松大鬧飛雲浦
73回	黑旋風喬捉鬼	梁山泊雙獻頭

となる。それぞれの中心的な登場人物をあげてみると、魯智深、林冲、宋江、閻婆惜、武松、武大、潘金蓮、西門慶、李逵と、水滸を代表するような人物ばかりである。これは一体何を意味するのであろうか。それはこの12回が、水滸を代表するような物語であるところから、おそらく最後まで手が加えられたのではないだろうか、＜裡2＞がある回に集中して出現するというがその一つの表われではないだろうか、ということである。

2. 語気詞 “li”

語気詞 “li” の使われている回をまとめると、次のようになる。

里：16, 24, 25, (28), 31, 36, 45, 73, 77, 90回

俚：2～5, 18, 86回

哩：7, 21～23, 28, 33, 37回

28回の＜里＞に括弧をつけたのは、天理本で使われているためである。この箇所に限っていうなら、おそらく天理本が古い表記法を残しているものと思われる。

語気詞 “li” の表記法について、太田辰夫1958で述べられていることをまとめると、ほぼ次のようになる。⁽¹⁰⁾

里，裏：唐五代から稀にある。

裏：宋代では多い。＜哩＞はあまり信用できない資料にみえる。

哩：元曲にきわめて多いが、元刊本では＜里＞を用いる。

ほぼ以上のようになるが、＜裏＞＜里＞＜哩＞については言及されているものの、残念ながら＜俚＞についてはふれておられない。しかし筆者はこの＜俚＞という表記法が極めて重要と考えるので、筆者が調査したものをここにあげることにする。⁽¹¹⁾

表5 元明資料における語気詞 “li”

年 代		作 品 名	裏	里	哩	裡	1	哩
元	代	元刊雜劇三十種	○					
		魯齋郎	○					
		謝天香	○					
		胡榮夢	○					
明	代	元末—洪武〔谷子敬作〕	○				○	
		元末—永樂〔賈仲名作〕	○					
		〃	○					
		〃						○
	代	洪武元年（1368）—永樂元年（1403）				○		
		宣德10年（1435）		○				○
		成化元年（1465）—成化23年（1487）	○	○				○
		弘治11年（1498）						○
		嘉靖37年（1558）						○
		萬曆30年頃（1602）		○	○			○
		16世紀前半	○	○	○			○
	代	城南柳						
		金安壽						
		菩薩蠻						
		玉梳記						

この表から、元末、明初にかけて＜里＞が優勢であったことが理解できよう。＜俚＞の方は、『單字解』を除けば『元朝秘史』と『水滸傳』しか使われていないのである（図版2, 3参照）。

しかし筆者はその後、＜俚＞を使った資料を発見した。しかもその資料に

ははっきりと洪武四年という年号がついている。それは『徽州千年契約文書』⁽¹²⁾に収められた戸籍調査書である。

＜𨮒＞が使われるのは歴代極めて稀であり、筆者の調査では、『元朝秘史』『水滸傳』『單字解』、それと『徽州千年契約文書』の戸籍調査書である。『單字解』が“li”の表記法として、＜裏，里，𨮒，哩＞の順であげるのは極めて示唆的であり、編者の“li”の表記法に対する歴史的変化の認識を示しているのかも知れず、大いに興味を惹かれる。ただ時期的には16世紀後半のものであり、しかもいわば『老乞大』の注釈書という性格の書物であるところから、＜𨮒＞という表記法成立時期を考える資料にはならない。とすると残るは『元朝秘史』と戸籍調査書ということになる。両者の共通点は何か？その成立が明初の洪武年間だということである。

一方、創作年代が比較的はっきりしている周憲王の作品は、ほぼ永樂、宣徳に集中しているが、その作品では語気詞としてすべて＜哩＞が使われ、＜𨮒＞がない。＜𨮒＞の出現が洪武以前であるか否かは速断できないが、永樂以降使われていないということは重要である。

以上のことから方位詞“li”の表記法の変遷を考えると、次のようになるだろう。

裏：宋，元

里：元代，明初で使われる

𨮒：明初洪武年間までで、永樂以降はないらしい

哩：永樂の頃から使われ出す。萬曆から普及か（？）

もし＜𨮒＞が使われた期間が筆者の推定したように洪武年間という短期間であったのなら、『水滸傳』で使われている＜𨮒＞が極めて重要な意味をもってくる。それは＜𨮒＞が使われている回の成立が、洪武年間でなかったかということである。むろん筆者は容與堂本の成立が洪武年間だ、と言っているわけではない。容與堂本は何らかの版本をベースに成立したものと考えられ

るわけだが、その時基づいたテキストの当該箇所が、洪武年間に成立していたのではないか、ということである。

では<哩>はどう考えるべきか。

<哩>が最も遅く使われるようになった表記法であることは間違いない。それは内閣本の“li”の使われ方にも反映されている。例えば表1で、

第2回 <哩>2 (内閣1)

第3回 <哩>2 (内閣2)

などとしてあるのは、北京本が<哩>と表記しているところを内閣本で<哩>に換えているということである。ただ第2回だけは、内閣本の<哩>を一つ残しているということになるが。中には、もとは明らかに<哩>を使っていたのを、<哩>に換えた痕跡を残している例すらある(図版5参照)。

このように内閣本が行った改訂は、相当あると考えられる。ということは、他の二種の版本でもそういう可能性は否定できない、ということである。現に第28回は、天理本は<里>としているが、北京本、内閣本はいずれも<哩>に作る。とすると、<哩>という表記法を使っているところは、初めから<哩>を使っていたのか、それとも本来<里>や<哩>を使っていたのが<哩>に改められたのか、判断できないということになり、<哩>という表記法を根拠として議論はできないということになる。

3. 各回の結びの言葉

章回小説の結びの言葉といえ、周知の如く“且聽下回分解”であるが、その前にくる語を見てみると、色々な表現があって興味あるものだが、そのうちでも『水滸傳』のそれが最も複雑で面白い。おそらく実際の講談に基づいたものに手が加えられたため、あれほどの複雑なものになったのであろう。

とはいえ、すべてが全く異なる表現になっているということではなく、ある程度パターン化しているのも事実であり、全体をいくつかのスタイルに分類することが可能である。

小論では語気詞<里><裡>が古い表記を残しているものと考えているが、それらが表われるのは、次のような回であった。

里：17, 24, 25, 31, 36, 45, 73, 77, 90 (計9回)

裡：2～5, 18, 86 (計6回)

この合計15回で使われている結びの言葉はどのようなパターンなのだろうか、また<不因…><不是…><正是…>などの結びの言葉のうちどれが一番多く使われているのであろうか。もし語気詞の<里><裡>という表記法が古いものとする、それらが出現する回も、当然成立が早かったはずである。その意味からこの15回の結びの言葉を見ると、8回にわたって<不是…>を使っていることがわかる。つまり半数以上が<不是…>なのである。このことから、結びの言葉のうち、<不是…>という表現は、古い表現の一つではなかったか、という推定が成り立つ。

ま と め

以上述べてきたことをまとめると、次のようになる。

1. 容與堂本『水滸傳』では、方位詞“li”のうち、最も遅く普及し始めた<裡2>が5回、6回など、限られた回に集中的に用いられている。それらの回の共通点は、いずれも『水滸傳』を代表するような物語の回であり、そうした回に最後まで手が加えられたため、<裡2>が集中して使われる結果となったのであろう。
2. 語気詞<裡>は、元明期の資料の使われ方から考えると、使われた期間が極めて短く、洪武年間であったと考えられる。とすると容與堂本『水滸傳』に見える<裡>は、その貴重な痕跡と考えられる。このことは『水滸傳』が洪武年間にある程度まとまった形になっている可能性があるということを示している。

3. 容與堂本『水滸傳』で語氣詞“li”の古い表記である<里><俚>が使われた回は計15回分ある。結びの言葉の一つ<不是…>が、その15回分の8回分使われており、<里><俚>との一致性が高い。そこから推定するに、結びの言葉<不是…>は結びの言葉のうち、古いパターンであったと思われる。

今回問題としたのは<裡1><裡2>という、わずか点一つあるかないかという文字の使い方である。そんなこと大したことではない、ましてそれくらいのことで『水滸傳』成立など云々できるものか、と思われるむきもあるかも知れない。筆者がこの二つの表記法が気になりかけたのは、十年ばかり前になるが、その時はやはり「こんな点の一つや二つ関係ない」と思っていたのであり、これほどまでに重要な問題とは意識していなかった。

しかしその後、いくつかの資料を見ていくなかで、認識を新たにしていっていった。点が一つか二つということであるから、誰もが無視しそうなことである。例えば本論であげた『類説』などはよい例で、もともと<裡>と書いてあるのに、『漢語大字典』では<裡>の例としてあげられている。上海古籍出版の『容與堂水滸傳』に至っては、北京本を底本としたと謳いつつ、語氣詞の<里><俚>を平気で<哩>に統一する。これは現代語における方位詞としては<裡>が標準的表記、語氣詞としては<哩>が標準的表記であるからである。しかし、もし<裡1><裡2>、あるいは<里><俚>という表記の違いが、時間的変化を反映しているとする、成立時期があきらかな資料を基準にしてそれぞれの表記が使用された時期を明確にできさえすれば、今度はそれを根拠として、成立時期がはっきりしていない資料の、成立時期を推定することも可能となる。

語氣詞の<里><俚>と<哩>では、偏をつけるかつけないか、つけるなら「人偏」なのか「口偏」なのかという違いが存在するが、それでも大した違いではないと無視されてきた。まして方位詞の“li”ともなれば、<裡1>

<裡2>は点が一つあるかないかという極くわずかな違いであるから、なおさら誰からも無視されやすく、また現に無視されてきた。その点が逆に言語研究にとっては幸いしているのである。『水滸傳』は時代的層をもった言語であることは疑いない。それは語彙ばかりではなく文字表記という点にも表われている。語気詞の<哩>は古い時期のそれをにない、方位詞の<裡2>は新しい時期のそれをになっている、そうした表記上の微妙な変化を確実に反映したものとして、貴重な記録だといえるのである。

上海古籍出版社の『容與堂水滸傳』(1988年)は、その「前言」で北京本を底本としたというが、語気詞の“li”はことごとく<哩>に換えてしまっ

図版

1. 『類説』卷十五(明天啓六年)

鸛鳴樓頭日暖蓬萊殿裡花香

2. 『單字解』(1・b・8)

哩 助語辭亦作哩 凡語有
用引音爲語助者皆用 裏等字哩

3. 『元朝秘史』(1・46・a・2)

也速該親家我家裏有箇女兒年幼小哩同去着來

4. 『徽州千年契約文書』

戶部洪武三年十一月二十六日致奉
聖旨訖典戶部官知道如今天下太平了也
止是戶口不明与哩

洪武四年 月 日

5. 容與堂本『水滸傳』(3・1・b・4)

你兀自頼哩見有原告人李吉在這里 (北京本)

你兀自頼哩見有原告人李吉在這里 (天理本)

你兀自頼哩見有原告人李吉在這里 (内閣本)

ている。従って上海古籍版の『容與堂水滸傳』は、こと語気詞“li”に関する限り全くあてにはできず、明代から今日まで脈々と保持されてきた貴重な記録を、現在になってみすみす改悪するというとんでもないことをしてしまったのである。

[付記]

小論で使用した『雜劇十段錦』は井上泰山教授（関西大学）御架蔵のものである。貴重な資料を快く借覽させていただいたことに感謝申しあげたい。また中央研究院歴史語言研究所傳斯年圖書館所蔵の周藩原刻本は、渡辺浩司君（北海道大学）の写真を借覽させていただいたもので、ここに記してその御好意に感謝申しあげる。

注

- (1) 佐藤晴彦1998. 以下「前稿」と呼ぶ。
- (2) 大内田三郎1982, 高島俊男1987参照。
- (3) 香坂順一1987 p.45
- (4) 使ったテキストは『金瓶梅詞話』（大安, 1963年4月～8月）。
- (5) 例えば脈望館本の中には、何焯が元刊本に基づいて校訂したものが何種もあり、その一つに息機子本『看錢奴』がある。その第一折〔玄篇〕に、
問甚麼隣家，那肯道攀鞍下馬，… (6. b. 7)
とある。それを元刊本は、
問甚麼隣家，那里肯攀鞍下馬，…
に作る。息機子本には<里>がないわけだから、当然何焯は<那>の後に“li”を補うことになるのだが、元刊本が<里>としているにもかかわらず、何焯は<裡1>を使っているのである。その他の箇所でも何焯が方位詞“li”を表記する場合は<裡1>を使うのであって、<裡2>は使わない。『看錢奴』末尾に“雍正乙巳八月廿六日燈下用元刻校勘仲子”とある。雍正乙巳とは雍正三年（1725）のこと。その時期でも依然として<裡1>が極くあたりまえの表記として使われていたことがわかる。
- (6) 使ったテキストは明天啓6年本（『北京圖書館古籍珍本叢刊62』, 1988年）。図版1参照。
- (7) 使用したテキストはそれぞれ次の通り。
大誥武臣：『皇明制書』上卷（1966年1月，古典研究会）
辰 鈞 月：周藩原刻本（中央研究院歴史語言研究所傳斯年圖書館本）
義勇辭金：〃（影印本，『全明雜劇4』所収）
降 獅 子：〃〃
八儒慶壽：〃（中央研究院歴史語言研究所傳斯年圖書館本）
常 椿 壽：〃〃
十 長 生：〃〃
神 仙 會：〃〃
嬌 紅 記：『古本戲曲叢刊初集』
開 宗 義：『明成化說唱詞話叢刊』（台湾，鼎文書局影印本所収）
西 廂 記：『奇妙全相注釋西廂記』（『全元雜劇初編四』所収）
琵琶記：『新刊元本蔡伯喈琵琶記』（『全明傳奇』所収。但し，不鮮明な箇所は『古本

戯曲叢刊初集』本で確認した)

十 段 錦：嘉靖戊午仲夏紹陶室刊

(8) 但し、乾隆期にあっても刊本と抄本では異なる傾向にあり、琉球資料などの抄本では、依然として<裡1>が根強く残っている。

(9) 韻書や辞典類で<裡2>に言及されるのは、ようやく『正字通』『字彙補』になってからのことであるのが、この間の事情を裏付けているといえる。

裏：良徒切、音李、…或作裡。 【正字通】申集下、衣部

裏：又與理義同、…俗作裡。 【字彙補】申

(10) 太田辰夫1958 pp. 379～381

(11) 佐藤晴彦1991 pp.32～33の表3を基礎として若干補ったものである。

(12) 図版4参照。『徽州千年契約文書』を調査するきっかけを作ってくれたのは、金文京氏（京大人文研）との立ち話からだった。金氏には感謝している。

参 考 文 献

香坂順一 1987 『《水滸》語彙の研究』光生館

太田辰夫 1958 『中国語歴史文法』江南書院

大内田三郎 1982 「『水滸傳』版本考——「容與堂本」について」『ビブリア』第79号

佐藤晴彦 1991 「近代漢語研究の基本問題——中国旧小説、戯曲を資料として」『外国学研究XⅫ』

——— 1998 「『脈望館鈔校本古今雜劇』新探」『神戸外大論叢』第49巻第4号

塩見邦彦 1985 『朱子語類口語彙索引』中文出版社

高島俊男 1987 『水滸傳の世界』大修館書店